俺が、絶望王だ、いや、らしい

9669

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたら、目の前にはテーブルと見たことがないような美少女が一名、その美少女が言うには自分は神で死に方が嗤えたから来世でも嗤わせなＹＯ。

らしい、マジですか。（マジです）

注意、この作品は作者の妄想煮詰めたような作品ですので、このキャラはこんなんじゃない！という方や苦手な方はブラウザバックをお勧めします。それでも、良いぜ！という方はお楽しみください。

目次

原作前
プロローグ『神は言っている』　1
第一話『超能力と妹と次期魔王』　16
第三話『高校入学』　31
第四話『この学園には王がいる』　46

原作前
プロローグ『神は言っている』

天国に、居ないまだまだ現役バリバリに働いているお母様、いつもお母様に、尻に敷かれている（物理）お父様お元気ですか。

「おーい」

私の、目の前には、だれでも、みたら、三度は振り替えるような、見たことがないような美少女が1人。

「おーい」

そして、周りは草原が広がっております。

「おーい、ってそろそろ聞け、おい、貴様」

美少女が、貴様と言った瞬間空気が凍ったように感じました。

はい、聞きます。

◆

「つーまーりー貴様は死んでしまいました、ＯＫ？」
そう言って少し、イラつきながら、目の前の美少女は言ってきた。
ＯＫ、じゃないよねどう言うこと俺どうなったわけ？
「貴様、死んで、それ見た、私哀れんで、仕方がないから、転生ＳＡ」
なるほど、なるほど、つまり俺死んだよね
「ｙｅｓ」
ふーん、ほー、って、いいわけあるかァァァァァァァ!!!!
「まあ、まあ、落ち着いて紅茶でも飲む？」
そして前には、いつの間にか湯気を立てている緑茶が
紅茶じゃないのかよ！
いや、普通に紅茶かと思ったんだけどそこで緑茶かよ。
まあ、飲むけど、飲みますけどね！
「これで、少しは落ち着いて話を聞いてくれるようにはなったよね？」
まあ、美人と、美少女の話は大統領の話よりも重って爺ちゃんも言ってたし。
「何だい？口説いているのかい？」
いや、口説いて無いけどてかあんた誰？

「私かい？私は、君たち人という種類の生物が崇めている神にも似た生物かもしれない生物さ」
　え、なにそれ、それって結局なぁに？
「まあ、現在は神と言うことにしていてくれ」
　へーでさ神サマー
「貴様は、意外とフランクだね、何だい？」
　今、俺の状態ってさ
「ああ」
　何？
「君のような低知能にも分かりやすく説明すると」
　すると？
「魂状態」
　へー、え、
「まさか、気付いていなかったってわけでも有るまい」
　はい、そうですよ、気付いてましたとも、ええ、ええ、気付いてましたとも、さっきから気付いてましたよ。
「いや、気付いたも何もさっき死んだこと確認していたじゃあないか」

はい、そんなの、現実逃避に決まってるじゃないですかヤダー。
「まあ、死んだことなど私にとったらどうだっていい」
おい、神。
「だがしかーし、貴様は私の、こ，の，私の、可愛らしいお目目に止まった」
そう言って神は、自分のめを指指した。
それはまたどーして？
「それは、」
それは？
「貴様の死に様がとてつもなく嗤えたからだ」
おいコラ、神コラ、表でろやコラ。
そして、神は資料みたいなのを取り出して、
「まあ、待て、まず貴様の、死に様は、まず、朝起きて、歯を磨いている時、電動歯ブラシが歯茎に当たり出血、それにビビって、足を滑らせて片足を捻挫、それでも、学校に行く途中、友達に声をかけられた時にびっくりして、もう片足も捻挫に、それでも頑張って学校について授業を受けて、その後帰ろうとしたら、学校で火事が起きて、急いで逃げようとしたら、両足捻挫で思うように行けず、他の生徒に、ぶつかって、悪化、けれども結局火事はボヤ騒ぎで、痛む足を押さえながら、その日のご褒美に、コンビニのス

イーツを買おうとして、レジに持っていったら、コンビニ強盗がやって来て人質にとられかけるが、てに持っていたスイーツを強盗の顔面に、スパーキング！動揺する犯人に金的を行い気絶させ、呆然とする店員に対して新しい、スイーツを持ってきて購入、その時使った左足の捻挫がまた悪化、その後、帰宅後スイーツを食べて就寝、だが、隣の部屋が火事になり、寝ていて気づかず炎に包まれて死亡。」

「これが、君の死因だよすごいね私が見てきた中でも中々珍しい死に方だよ」

俺、捻挫悪化しすぎじゃね。

「そんだけ長い死に方だったんだ俺、てか捻挫悪化しすぎだろもうそれ骨折してるよね。」

「大丈夫君の、人生はこれからも続く、安心したまえ」

そうして、神は可愛い笑みを浮かべた。

「そういけば、最初に転生するって言ってたな。」

違った、悪魔みたいな笑みだ。

「ああ、私はあの死に方を見てね君は次の人生も私を楽しませてくれるかなと思ってね」

なるほど、

「つまり、ピエロになれと？」

「嫌、私は君には自由に生きてほしいのでねあまり私からは、指図とか指示はしないよ」

「ほう。」
けれど、何も無し、か。
「まあ、さすがに何もなしではいどうぞと言うわけにもいくまい」
「まあそうだな。」
やったぜ。
「ゆえに、君に君の知っているアニメの能力を、君に合わせて私が授けてあげよう」
マジか！神様太っ腹！
「それだったら、ギルガメッ…」
「だが、君が選べるとは一言も言っていない」
え、
「え、」
「残念だがもう君がここに来た時点ですでに選択は終わっている」
「まあ、安心したまえ私は、優しい神だ、ちゃーんと最初から赤ん坊のときから記憶は残して置いてやる」
そう神は嗤った。
「え、え」
「まぁ、前世はふつめんとやらだったようだからな心優しい私は、君の顔と身体を話して

いる間に作っておいた」
　いつの間にか、ふわふわしていた身体が実体を得ていた。
「何、怖がらなくていい、ただ、貴様の過去を読み取って金髪イケメンに憧れていたようだからな、それに近いキャラにしておいた」
　え、過去読み取ったって
「まあ、そうだな、前世の罪を背負いし最悪の悪魔、黄金の聖剣使い殿（笑）」
　それはアアアアアアアアアア!!
「の、ノノノノオオオオオオオオオオ!!!!!」
「どうした？聖剣使い（笑）前世の罪はど!!うした？最悪の悪魔は？前世、禁断の恋に落ちた魔国の姫君は？」
「ノォォォォォォ!!!」
「あれどうした？叫んでばかりだな？聖剣使わないの？王子様フェイスは？いまなら金髪イケメンだよニコデ使わないの？王子様フェイスには標準装備だったよね？」
「何で、それを知っている！」
　愉快そうに嗤いながら
「知っているよだって神だものそれよりも、話をしよう」
　その後二時間程体感時間は二十時間程からかわれ続けた。

ルシフェルのほうが天使だよ。

◆

そして、神は机に肘を着きながら聞いてきた。

「それでなんだけどさ」

ぼく、もう、つゅかれた。

「何、ですか?」

神は少し不機嫌そうな顔で

「今私は結構機嫌が良い、けれど時間だ、そろそろ転生させないと、この空間の延長料金を払わないといけなくなる」

えっここ、そんなカラオケみたいなシステムなんだ。

「というわけで、最後に、私の加護を与えよう拒否権は君には無いけど」

拒否権ないんだ。

「まあ、あって困る物ではないし効果は細やかなものだ」

「どんなのなんだ?」

「まあ、私の今の権能だと幸運を与える力と知恵を授かり安くする力と原作に関わりやすくする力いわばトラブルに巻き込まれ安くなる効果だね」

俺は神に、渾身のイケメンフェイスで

「拒否します」
「却下します」
　嫌だ！トラブルとか嫌だ！
「嘘だ！てか俺が行くとこ原作あるのね」
「まあ、君が知らない所ではないからまあ原作キャラと会って推測してくれ」
　まあけれど、知らないっていうところじゃないらしい。
「最後に、忠告だ」
　神は、これまでに無い真剣な顔で、
「別に聞かなくても良いのだが、その世界の人々は生きている決して二次元の存在ではない」
「君のように、笑い、君のように、泣き、君のように、苦しみ、君のように楽しみ、君のように、黒歴史も作る」
「だから、決してその人、1人、1人を軽視しないように」
「わかったか？」
「わかった」
　そして、最後に、神は
「よし、返事をしたな」

え、
そして、今までで最高の笑みを浮かべながら、
「いやー、最後に君が了承してくれて助かったよ、さすがにこの、私が、ハイパープリーチーゴットでも勝手に人を転生させたら怒られるしね」
え、まさか
「そう君の、予測通りさ、実は拒否権有ったんだよ」
マジですか。
「マジだよ、じゃあ、そろそろ行こう、君の了承も得たしね」
そして神は嗤いながら
「まあ、君の不幸を私は祈っているよ」
神が、（パン）と手を叩くと、俺の足下に穴が生まれた。
「最後にいうことあるかい？」
その問いに俺は
「くそったれ、神死ね！」
それでも嗤いながら、
「いいねぇ、そんなに元気なら頑張りたまえよ」
そして、俺は

「くそがぁぁぁーーーーー」
と捨て台詞を残して落ちていった。
◆◆
神Ｓｉｄｅ
いやー、いいねぇ、あんなに不幸な死に方をしたらきっと次の人生も愉…ゲフンゲフン…楽しい生き方をしてくれるだろう。
「いやー、けれど、安心したまえ、原作に関わっても変なことをしないし、そんなに悪いことにはならないよ」
一応、関わりやすくするする力はつけたけどね、けれども
「所詮、関わりやすくする程度の力それでも、関わるのは君次第だよ、」
「まあ、君はある程度善人だからねぇ、関わるのは確定だろうね」
その顔は、悪魔みたいだった。
「誰が、悪魔だ」
◆◆
主人公Ｓｉｄｅ
まあ、転生した訳ですが、今この状況を説明しますと、真っ暗、なにも聞こえない、動けない。

積んだ。いや、あの神様まさか石の中にとかドラクエみたいなことないよね？ないよね？本当に、ないよね？

……暇だ寝よ。

◆

それから、多分体感時間で一年くらいかたった、いやわかった、これお母様のお腹の中ちゃいますん。

そういけば、神様記憶のこしとくって言ってたな、うん、あれそういえば、身体みたいなのができてるな、うん、マジか気付かなかっ：

あれ？何か下のほうが動いてる、え、まさかの今出産ですかい、あ、何かジェットコースターみたい、

一応泣いたほうがよいか、

「オギャア、オギャア」

「産まれましたよ、立派な男の子と女の子です」

看護婦さん、みたいな人が言ってるえ、あ、妹いたのね。

「やったよ、マリー男の子と、女の子だってさ」

「やった、わね」

「名前はどうする？ここは日本だから、日本風にするかい？」

「いや、決めてた、名前が、あるでしょ」
「ハハ、たしかにそうだね」
何か、両親らしきひとが話してる。
「よし、」
お、近づいてきた。
「生まれる前からこれにしようと決めてたんだ」
ん、はっ！これで俺がなんのキャラなのか分かるんじゃないか。
「男の子は、ウィリアム、女の子はメアリだ」
うーん、わからん。名字プリーズ。
取り敢えず寝よう。
「あら、ウィリアムは大人しいわねお兄ちゃんだからかしら」
「産まれた時は、数分差だから、生来の気質だろう」

◆

そして、数年が過ぎた。いや、その間どうしたって？まあ、この精神年齢で幼児プレイはキツいとだけ。
まあ、やっと最近自分のことがわかったんだ。
その日、まだ小さい妹と、遊んでいると、お父様が。

「お前たち、お酒みたいだな、よし、お前たち二人にあだ名をつけてやろう」
「あだな？」
　そして、お父様は酒をみながら、
「そうだな、メアリは、ホワイト、ウィリアムは、ブラックっていうのはどうだ？」
　マジすか、え、俺、絶望王ですやん、いつか、とりつかれるの？マジで？
「どうした？ウィリアム？」
「どうしたの？にいしゃん？」
　マジか、てか、妹ホワイトかい！気付かんかったまずここヘルサレムズロットじゃないし、日本だし、マジか、え、てことは俺、［奪うなら僕から奪うんだ。］っていうのかマジか。
「にいしゃん？顔色悪いよ？」
　顔が青くなってたらしいそう聞いて来た首をキョトンと傾けて、
　あ、もうなんでもいいや、このかわいさのためなら死ねるね。
「何でもないよ、ホワイト」
　と、言いながらホワイトの頭を撫でる。
「わあ、にいしゃん？」
　驚いたようなホワイト。

「お、もう使い初めたのか気に入ったのか？」

いや、気に入ってねぇよ。

あーけど、どうしましょうかねぇいやほんとに。

第一話『超能力と妹と次期魔王』

そういえばやっとこの世界が、何の世界なのか分かったんだ。
ん？少し急過ぎないか？だって、いや、実は自分が絶望王だってわかったその日の、寝る前に神から手紙が届いたんだ。
上から、自分がベッドに倒れ込んだ瞬間丁寧に、梱包された段ボールが落ちてきた。
頭の上に。
その時あっ、これあの神だなって確信した。
ともかく、段ボールを開けて見ると手紙が一枚だけ入っていたんだ。
内容は、
親愛ならないウィリアム君へ
　ハーロー元気にしてるかい下等生物くん。
産まれてから数年で自分が誰かわかって偉いね。
私の、予想では三十年はかかると思っていたよ。
気づいたご褒美に良いことを教えてあげよう。

君、超能力使えるよ、これは嘘ではない、だって、君が段ボールに頭をぶつけたときに使えるようにしたからね。
安心したまえ、本物みたいに細かい操作が苦手とかじゃないからね。
まあ、地球にいる間は出力は制限をかけているからね安全だよ。
操作能力が高くなれば外していくが。
だから、出力は今はこぼれたコーヒーを短時間止めれるぐらいだよ。
それと、君に私達からプレゼントだ。
次の日を楽しみに待っていてくれ。
親愛なるスーパープリチーハイパーゴッデスより
追伸、妹が好きなのはよいがあまり甘やかしすぎるといけないと私は思う。
という内容だった。
けれども1つ言いたい、俺超能力使えるのか、スゲェ。
取り敢えず、自分の部屋にあったホットココア（コーヒーがいいって言ったら子供だからって渡された）を、えいっ、やあ！
「はぁ！はぁ！はぁ！」
あっ、ちょっと動いたよし、今日は朝までオールナイトだ！
♦？ホワイトＳｉｄｅ

今日は、凄いものを見てしまった。
いつも通り、寝た後、夜中急に、起きてしまって、トイレに行きたくなり兄さんの部屋を通りかかった時だった。
兄さんの部屋から何か音が聞こえる。
「は……！」
いつもだったら兄さんも寝ているはず。
気になって様子を覗いたら、
「はぁ！はぁ！はぁはぁはぁはぁ！」
ホットミルクに、てをかざしてはぁはぁ言っている兄さんだった。
とっさに、
「にいしゃん？」
と言ってしまった。
「えっ、ホワイトな、なぜこ、ここ、ここに？」
兄さんは動揺していた。
けど、私は分かるこれは、
「にいしゃんってちゅうにびょう？」
「グハッ！」

兄さんは倒れ込んだ。
「しってるよ、テレビで何もないところになにかあるっておもったり、ぜんせのきおくもないのにあるっていったり」
「グハッゲホッ！」
「手から炎がでるっておもったり、眼帯でめもわるくないのに、つけたりするげんじつから、のがれたいひとのなるびょうきってママがいってたよ」
「グボホッ！ゲホッ！グフッ！」
だけれど、
「けどね、にいしゃんを私みすてたりしないよだって、にいしゃん大好きだもの！」
「グルハァ！」
そして兄さんは倒れた。
次の日、お母さんに言ったらそっとしておいてあげなさいと少し遠い目で言われた。
♦？ブラックＳｉｄｅ
死にたい。
嫌、一回死んだけどね。
けどね、死にたい。
何が辛いって超能力の練習を見られてしかもそれを圧倒的スマイルで、肯定されたの

が辛い。
しかも、朝食の時ズーッと両親に生暖かい目でみられたのが辛い。
うん、外に出よう。
こんな時は、身体を動かすのが一番だ。
そうと、決まれば。
「母さん外で遊んでくる！」
「わかったわ、はい」
と言ってお母様は五百円をわたしてきた。
「母さんこれは？」
そして、母さんは、
「何でも良いから買って飲んで忘れなさい」
母さんにはお見通しだった。
「か、母さん」
「覚えてても良いこと無いわよ飲んで忘れて反省しなさい」
多分顔が真っ赤になっていると思う。
「い、行ってきます！」
「行ってらっしゃい」

少し遠い目をした母さんに見送られた。
けど、母さん子供に飲んで忘れろは無いと思う。
♦？♦？
所変わって、ここは公園。
そこには、ジュースを持った金髪少年と、隣には、違うジュースを持った平凡そうな黒髪の少女が二人ベンチに座っていた。
っていっても金髪は俺なんですけどね。
なぜこうなったかというと。
♦？♦？
というわけで、やって参りました。
家から徒歩3分程のこの公園、普通と侮ることなかれ、そこにはブランコ、ジャングルジム、砂場、滑り台、ベンチ、そして、自動販売機！すみません、普通ですね。
けれど、俺の目的は自動販売機だ！さてとなーにのもうかな、ん？
ここは公園そして、今は日曜日ということは結構子供がいる、けれど、1人だけ少女？多分少女らしき子供がいた。
ま、まさか、ボッチなのか！この年でか、マジか、ならこのお兄さん（今は同じ年）が話しかけなければなるまい。

えっ、お前に友達はいるのかだって？フツこの金髪イケメンルックスが悪いんだ、前小学校で女の子に笑いかけたら。

『やあ、今日は良い天気だね（キラリ）』

最高の笑顔、パーフェクトだ、どうだ！

『へ、あ、あの、え、ひ、』

『ひ？』

何だ？くっ足りなかったかならばもう一度！

『大丈夫かい？（ニコッ）』

これで、止めだァァァァ!!

『ひやあァァァァァァァァァァ!!!』

そういって、彼女は全力で逃げた。

なるほど、確かに知らない人しかもあまり親しくないひとに急に笑いかけられたら恐いよねうん、ごめん。知らない女子よ。ごめん。

その後でクラスからすごい浮いた。女子に話しかければさっきと同じように避けられ、男子からも、この金髪イケメンルックスのせいで避けられる。

もう、どないせいちゅうねん！

まあいい、話を戻そうまず今は、情報だ、情報がいる。

まず、彼女はベンチに座っている、そして、羨ましそうに砂場を見ている、砂場には遊んでいる女子数人、そして、まるで話しかけそうな、けど話しかけれないようなソワソワした態度、これらの情報から、

彼女は、コミュ障ＤＡ★

わかったからどうしたんだって、また逃げられるだろ、だって、よく見ろ、この手には小学生にとっては大金の五百円がある。

そう、買収だ。

買収と言っても簡単これでジュースを二本買うじゃろ。

それを、渡して自然に隣に座る。

そうすれば、彼女は逃げない。

名案だろう？

よし、始めよう、覚悟は良いか？（逃げられる）俺は出来てる。

♦？少女Ｓｉｄｅ

今日も、話しかけれなかった。

理由は分かってる、それは、私が他の人の話題に着いていけないからだ。

はぁまた一人か……

「はい、どうぞ！」

「へ、、、、え！」
金髪の少年がこちらに笑顔でジュースを渡してきていた。
♦？ブラックＳｉｄｅ
「へ、、、、え！」
ふ、ふふ、ははは、フハハハハハ!!
計画の第一段階成功、慌てておる、慌てておる。
まぁ、俺もこんなことになったら慌てるけどね！
「どうしたの？」
「いや、あの、何で」
「あっこれ？」
と言ってジュースを、上に上げる。
「そっそれ！何でわたしに？」
フッ、その反応を待っていた。くらえ！俺の前世の恋愛経験（恋愛シミュレーションゲーム）で培った友情テクニック！
「君少し元気がなさそうだったから」
「何か悩んでいるなら聞くよ？」

ふん、パーフェクトだ。
「へ！じゃあ、す、少しだけ」
勝ったな、計画通り（ゲス顔）
♦？
えーっと、ようはあれだ。
普通の人と好きなものが違うから話せないよーってわけだけど、一緒に遊びたいんだよーってわけだ。
「なるほど」
「やっぱり変だよねごめん。帰……」
「イイんじゃないかな」
「へ？」
「違った、別にそれって変えたりしなくても良いと思うよ」
「え、」
「これは、僕の意見だけど、人と人ってさ別人でしょ確かに多数の意見というのはあるけれどそれで、自分の個性を潰してはいけない」
「け、けど、それをしたら」
「話さない」

「え？」
「別に、無理して話さなくても良くない？これは、僕の持論だけどね友達は量より質、いわば百人の友達よりも、数人の友達だ。家の妹は、コミュニケーション能力が高いから百人位友達いるけど」
「へぇーえ？」
　いや、本当にね、なぜか俺の方には誰も来ないのに妹の方には来るんだよ。いや、嫉妬？そんなものしてないよ。妹にお兄ちゃん嫉妬なんかしない。ただ、枕が冷たくなっただけ、慰められたけど。
　やっぱり、親しみやすいのが良いのかな？
「だから、話さなくても良くない？」
「けっけど！私にはそんな友達いないよ！」
「安心して僕にもいない」
　なんか、やっちまったみたいな顔になってる。
「ごっごめんなさい！」
「いや、大丈、あ！」
「へ、な、何ですか？」
　そうだ！

「イヤー、傷ついたなー心が傷ついたなー」
「へっ、す、すみません」
「謝ってすむものかな？」
あっ顔が青くなった。
「あ、あの、私お金持ってなくてあの」
さすがに、やり過ぎたか。よし！
「なら、僕の、初めての友達になってよ！」
「へっ、は、ははは、はい！こ、これから宜しくお願いします！」
おっ一気に元気になった。
「じゃあまず名前を教えて？」
「私の名前は、南雲ハジメです」
ハジメちゃんね
「宜しく、ハジメ僕の名前は、ウィリアム・マクベス、親しみやすく、ブラックって呼んでね」
ハジメ、ハジメね、うん、いい名前だね、ん、南雲ハジメ、ありふれの主人公の名前じゃあねえかああァァァァァァァ!!!!
やべーよ、やべーよ、次期魔王様に対してあまりに不敬だったよやべーよ、バンッだ

よ、バンッ何かあったらすぐにバンッする魔王様の幼少の頃か、なるほど、魔王は昔は女だった。なるほど、って無理あるわ!!ボケ!って考えたの俺だわってことはこの世界ありふれかよ!!マジかよ、いや、知ってたよ、好きだよ、ありふれ好きだけども、読むのと体験するのでは意味が全然違うわ!いや、待てよ、落ち着け考えろ、よく考えるんだ!このまま、何もせず関わらないかそれとも、今のうちに友好を深めてバンッされないようにすると考えるんだ。あれ?けど、これ意外と良くない?よし、この作戦だ!そうだ!忘れていた、このｍｙボディは超能力者だしかも、成長すれば、

超高層ビルを何本も浮かせてパネルにする、一睨みで人を木端微塵に爆散、瞬間移動、あっこれだ、これしかないいくぞ!ぼくのかんがえたさいこうのさくせん。

ハジメに媚びを売り気に入ってもらい、超能力を鍛え上げて強くなりそして、殺されそうになったら瞬間移動で死を偽装して逃げる。

『最高!』『完璧だ!』『パーフェクト!』『ちくわ大明神』

脳内の俺も絶賛している、いけるぞ!

なんか、中に変なの入ってたような。

尚、この間３秒であった。

「取り敢えずまた明日遊ぼう!」

うお!何か、ハジメ様が元気になられた。

よし、ここは子供らしく。
「うん、わかったよ、ちなみに家はどこ？」
「え、あそこだよ」
と、言って指差したのは、俺の家の隣でした。
ｏｒｚマジですか、おい、どうする、ここで、正直に話すか、それとも、嘘を……
「なにか、しようとした？」
え、顔怖くね、目にハイライトがないよ。
「い、いや何も」
「ならいいけど」
ま、まさか考えを読まれたのか、いや、まさか、なぁ
「あっ」
何でしょうか、ハジメ様ァァァァ
「なんだい、ハジメ？」
「ブラックの家はどこなの？」
♦？♦？
「おかえりーってどうしたのそんなやつれた顔で」

「母さん、友達できた」
　次期魔王の、
「あら、今日はお赤飯ね！」
「なんでだよ！」

♦？ハジメＳｉｄｅ
　初めて友達ができた。
　私には勿体ないくらいけど、ブラックも言った通り、友達は量より質か、じゃあ、絶対に離さないようにしないとネ
「そういえば、何でウィリアム・マクベスで、何で、ブラックになるんだろう？」
　うーん、まあ、いっかだって
「何時だって聴けるもんね」

第三話『高校入学』

あの悲惨な事件から早くも十年たった。

十年経つの早っ！という人も居るかも知れないがまあ少し聞いてくれ、実はこのｍｙボディ頭が良いんだ。

えっ？何それ自慢か？やんのか？おっ？という人は少し落ち着きたまえ、さあ、紅茶でも飲んで、えっ？緑茶？まあそれはそれだ。

とにかく、俺は魔王（次期）と友好関係を結ぶことに成功した。

しかも俺の考えた作戦はこのｍｙボディの頭の良さによって、即興で考えた物よりも良くなったんだ。

その作戦によって他の人との友好度も上がった。

けれど、その作戦によって最近、目線が怖い。

はっ？何言ってんの自意識過剰ですか？と言いたいのはわかる。わかるが聞いてくれ。

それは、妹と一緒に夏服を買いに行ったことだった。

あー、暑い、あっついなぁ
と言って、人をダメにするソファを二つ占領している時だった。
「あ！兄さんずるい」
その声のした方を向くと、少し怒った我が妹がいた。
「どうしたんだい？」
「ずるい！私も座る！」
ふっ、甘いぜ我が妹よ！
「残念だったな、このソファは一人用なんだ。」
「いや二つ使ってるじゃん！」
君のような勘の良いガキは嫌いだよ。
だが、しかし。
「いや、ひとつだけしか使ってないよ」
「嘘だ！」
「いや、妹よ、よく考えるんだ今この状況を君だけの視点で考えてはならない。君が二つ

だと言ってももしかしたら他の人が見たら一つかもしれない。物事を自分の憶測だけで考えるのは悪いことだ。」

完璧な反論……

「くぅーん」

何……だと……。

こ、ここでその、捨てられた子犬みたいな目を使うのかや、やめてくれそれをされたら。

「くぅーん」

「よし、わかった。ならおいで」

と言って手を広げた。

「やったー!兄さん大好き!」

一つ言っておくことがあるとするなら

「ゴフッ!」

「兄さん!?」

俺の腹筋はそんなに無いことだ。

♦?

その後二人でゲームをしていると。

「兄さん」
「何だい？」
「服を買いに行こう」
　この妹は急にそんなことを言ってきた。
　何故だ？
「なして？」
「今年の夏服無いでしょ」
「なんで、知ってる？」
　何故知ってるんだ？
「いや、同じ家に住んでるし」
　と、キョトンとした顔で言ってきた。
　確かに、母さんが居ない時が多いから掃除とかはホワイトがしている。
　ちなみに俺は料理担当。
「まあな、たしかにそうだ、よし、行こうか」
　と、俺は座っていたソファから起き上がる。
「よし、じゃあどこに買いに行く？」
　別にどこでもいいけど、まあ、

「最近出来た、ショッピングモールにでも行くか？」
そう言うと、嬉しそうに
「やったー！じゃあ、じゃあ、タピオカミルクティーアイスナダデココ買ってね！」
何その劇物。
「自分で買えば良いだろ」
そう言うと、また
「くぅーん」
と言ってきた。
「わかったよ、降参だ。トッピングはいるかい？」
「アイスがトッピングよ」
さてと、財布何円入ってたっけ。
♦？ホワイトＳｉｄｅ
家の兄は、凄くモテる。
それは、それは、モテる。
理由は簡単だ。
まず、ルックス。
「ん？どうしたんだい？ホワイト？」

金髪碧眼優男風のイケメン。
しかも、その次は、
「なんだい？熱でもあるのかい？」
早々こんな風に女の子に対してまるで恋愛マンガみたいな態度を取ってくるこ……へ？
目の前には、兄さんの綺麗な青い目があった。
「ひゃぁ」
「うおっ！」
「に、兄さん。な、何を」
「何をってホワイトさっきから上の空だったから普通に熱でもあるのか心配したんだよ」
だっだからと言って普通、普通おでこを当ててくる？普通、普通ってなに!?私がおかしいの!?
「まぁいいかさっさと行こう」
まぁいいか、じゃないでしょ！うう、ならパフェもつけてもらうわよ。
「兄さんパフェ追加ね！」
「何でさ」

兄さんは、がっくりと項垂れた。
♦?ブラックＳｉｄｅ
何故かタピオカミルクティーアイスナダデココに引き続いてパフェまで奢らされているブラックです。
てっ言っても余り高くなくて本当に良かった。
「んーおいしい」
妹よ、それはお兄ちゃんが奢ったパフェだぞ味わって食べろよ。
ちなみに、俺はブルーベリーパンケーキです。
決してあのお笑い芸人のギャグを思い出したわけでは無いよ。
にしてもさっきから四方八方から視線が来る。
はっ!まさか、ここには男が来てはいけないのか来て良いのはカップルだけだ!とかなのかな?
よし、
「ホワイト、ホワイト」
「何?兄さん?」
「一口上げる」
と言って俺はパンケーキを切り分けたものをホワイトの口に入れた。

「あーん」
「えっ？あ、あーん」
「美味しいよねここのパンケーキ」
ふっ、これならこの視線もなくな……ら無い！
嘘だ！（嘘じゃない）もっと視線が強くいや険しくなったよ！
「に、兄さん！」
ビクッ
「どうしたの？ホワイト？」
「お、お返し」
と言ってパフェを一口渡すと思ったら、タピオカミルクティーアイスナダデココの方を渡してきた。
Ｗｈｙ？
妹よ、パフェならわかる。だって、違うスプーンを使えば良いからね。うん、パフェならわかるよ。
けど、タピオカミルクティーアイスナダデココは、ストロー１本しかないんだ。間接キスになるぞ。
良いのか妹よ、お兄ちゃん飲んじゃうよ、躊躇せずに飲んじゃうよ？躊躇いなんかし

ないよ？よし、行くよ行っちゃうよ？

この間の思考時間僅か一秒未満だった。

「なら、頂く……」

「何……してるの？」

声のした方を向くと次期魔王様が笑顔で固まっていた。

何か、もう迫力なら、魔王様だよ。

すごく、怖いです（(((；゜Д゜)))

「あら？こんにちは南雲さん」

「あぁこんにちはホワイト？」

ホワイトが席から立った。

と同時に俺は逃げ出し……

「ブラック？」

「兄さん？」

はい！座りまーす。

その後、ハジメに説教された。何故だ？

その時から他の人の視線が怖くなった。
ということがあって今は勉強している。何故勉強しているかって?俺は良いんだがな頭良いし。
じゃあ誰のかって?ホワイトのだよ。
ホワイトは運動能力は高いのだけれど知力は高くない。
二キロ走ってもケロッとしていた。
俺?俺は五百メートルでバテる。
だから今勉強を見ている。
「なぁ別に俺とおなじ高校受験しなくてもいいんじゃないか?」
「だめ?」
「駄目じゃない!」
可愛い!!
さてと、頑張りますかねっと。
「あっホワイトそこ間違ってるよ」
「えっどこが?」
「えーーっとまずここは……」
二時間後

「つかれたーー」

妹は、疲れたのか机の上に体をぐてーーと伸ばしている。

「お疲れ様ご飯出来てるよ」

「わぁありがとう兄さん」

ピンポーン

んっ誰だ?

ピンポーン。

えっ何これ怖い。

と、取り敢えず出ることにしようそうしよう。

「はっはーい!直ぐでます!」

扉を開けるとそこには、

「ハロー、下等生物くん今暇だろ?暇なんだろう?暇じゃなくてもつれていくがね」

俺を転生させた神がいた。なぉ美貌は変わらずの模様。

それを見た俺は、

今出せる全力の念動力を使った。
「オラァ!!死に晒せやゴラ!!」
が、普通に、
「何をするかぁぁ！」
「ヘブシッ！」
普通に叩かれた。
「君客人に対して失礼では無いかな？」
それに対して
「呼んでもないわ！この邪神が！」
神はいつになく愉快そうな顔で
「私が邪神とはねぇ私ほど人間を愛してる神などそんなにいないというのにねぇ」
「嘘だ！お前絶対俺のこと嫌いだ！」
「いやいや、君ほど今の僕を虐にしている……」
「している？」
そう言うと、神はまるで女神のような微笑みで
「玩具はそういないよ。おめでとう。」
やっぱり悪魔だ。

「ああ、それと、君原作から逃げようとしているね」
ば、ばれたのか、確かに遠い進学校に行こうとしていたが。
そういえば、声がでないぞ！えっ何これ（。Д。）
「あっそれは君を魂だけにしたからだね」
なっなんでそんなことを……
「何でそんなことをしたのかだって、簡単だ」
「面白そうだから」
こいつ！
「あっそろそろ戻りそうだねじゃあ、要件だけ言うことにしよう」
「実は、私達の1柱の呪い担当の神がね君に原作に関わりやすくする力を間違って強くしてしまってね」
「大丈夫君には、鍛え上げた超能力があるそれを使えば大丈夫だ」
「ちなみに犯人の神は強くした時『あーてがーすべっーてーしまーたーごーめーんーね』と言っていたよ」
「それと、『ごめんね、僕の籠あげるから許してヒヤシンス』とも言っていたよ」
「じゃあ、頑張ってね」
まて、まて、まず色々言いたい事は有るが取り敢えず籠ってなんだァァァァ加護じゃ

ないのかよ！

「はーい、戻しまーす」

フザケンナァァァァ

♦？神Ｓｉｄｅ

思っていたよりも成長が早いな今の私を五ミリ動かすなんて。

「まあ悪いことにはならないだろうし、能力制限を少し緩和させておくことにしようかな」

神は、まるで女神みたいな笑顔を見せた。

「おっと、乙女のプライバシーを守りたまえよ」

……ってだんまりか、まぁ良いだろうそれも楽しみだ。

「そろそろ、あれを準備しておくか」

見せて貰うよブラックくん。

……

……

…

「そろそろ、シツコイゾ、キエロ」

♦？ブラックＳｉｄｅ

戻ったら高校受験の会場前だった。
しかも、ありふれの舞台の高校だ。
絶対あの神殺す。
あー、記憶の整理出来た。
どうもあの空間は時間のズレがあって3分程いただけでも9ヶ月程経つらしい。
そのせいで高校に行けないのは可哀想だからオートで操作していたらしい。
らしいっていうのは今説明が来たからだ。
説明っていうのはポケットに紙が入っていたからだ。
それと、高校は変えといたよーん。らしい。
ただ一つ、フザケンナァァァァ何故だ！くそが！原作には関わる定めなのか！
「どしたの？兄貴？」
隣には、可愛い妹と、
「大丈夫？ブラック？」
ハジメ（次期魔王）がいた。
「何でもないよ」
さて、頑張りますか、はぁ（ ´ Д｀ ）

第四話『この学園には王がいる』

その学園は普通だった。えっ？異世界転移が起きるような学校はふつうじゃないって？……気にするな！…話をもどそう。

正確にはその学園の屋上がだけれど、そこは置いておこう。あれ？普通だった。って過去形だろ？おかしいではないかと、思った人がいることだろう。確かに間違っている。普通ならそう思った人が正解だ間違ってなどいないと俺が認めよう。

だがしかし、これを見てもそういえるかい？

今俺は屋上にいる。まず、空を見よう青空だ。今この青空の下昼寝でもしたらさぞ気持ちが良いだろう。

後ろを見よう。誰も居ないし、誰かが残したゴミが転がっているだけだ。

下を見よう。昼休みだから、サッカーをしている人がいる。運動が苦手だけど今は全力で動かしたい気分だよ。

さて、うん、何故前を見ないんだって？それはね。

「何か至らぬ点がありましたでしょうか？我が王よ」

クラスのカースト一位の天之川くん。
原作では、容姿端麗、成績優秀、イケメン、スポーツ万能、完璧超人、だが、自分の正しさを疑わず都合良く考えてしまう欠点を持つ、イケメン、といった感じの特徴だったが今は……今は止しておこう、うん俺の精神安定のために。
次は、
「おい、糞の川、兄貴に何喋りかけてる、お前の気持ち悪い声をかけるな、殺すぞ」
こいつは、檜山大介原作では、ハジメを初恋拗らせて奈落に突き落としたが今では俺を兄貴とよんで慕ってる。
その次は、
「神さま、こんなやつらは放って置いておきましょう。こんな、類人猿は淘汰されるでしょうから」
そう言って、俺に話しかけて来たのは中村恵里、原作では天之川ゾンビを作ろうとしたクレイジーサイコパス。
今は俺を神と呼んでいる。
その三人が俺にヒザマツイテイル。
なぜ、こうなった。とボブは訝しんだ。
ボブって誰？

「檜山！やはり貴様は王の家臣に相応しくないな、やはり問題を起こす前に、粛清する！」

と、糞の…天之川くんが檜山にメンチ切ってる。

「あぁん？家臣だと？俺は家臣なんかじゃ無い！舎弟だ！」

檜山怒るポイントずれてるぞ。てかヤバイ喧嘩始まりそうだ。

そこで、中村さんが、

「貴方達も神の信徒に相応しくないんじぁないかな？」

「口を塞げ売女が！」「黙れビッチ！」

「あぁん？」

空気が凍った。

はぁ、ああ、もう少し。

「黙れお前達」

やっべ、声出ちゃった。

大丈夫かな？

三人共真っ青に……

「王の覇気だ」

と言って光悦した表情で肩を震わせる天之川。

「こ、これは兄貴の威圧！さすが兄貴！」
　と言って、笑顔で足を震わせる檜山。
「か、神の神気」
と言って、膝まずいて何かのポーズを取り出す中村。
いや、なって無いなこいつら。
本当にどうしてこうなった。

その後俺は受験を無事に合格して入学した。
入学式を、終わらせて、２ヶ月した日曜日、部屋でゲームを見ていると配達があった。
頭上から。
あっこれあの神だなって確信した。（二回目）
なんだろう？と見ると籠だった。もう一度言おう。籠だ。編み目まで丁寧に作られ工場で作られたとかではなく丁寧に人の手で作られたことが見ただけで分かる。まごうことなき籠。
あれ本気だったんだ、ギャグかと思っていた俺は一瞬思考を放棄した。
取り敢えず中を見ると、手紙と大きな袋が入っていた。

手紙の内容は、

拝啓ウィリアムマグネス様

この度は、私のミスのせいで貴女に多大な迷惑をお掛けさせてしまって誠に申し訳ありませんでした。

最初はこんな始まりだった。俺は目を疑った。こんな手紙を出すのか呪い担当の神、あんたあの神よりもいい人だよと思った。

今回の件はあなた様の不幸を肴にスピリタスを浴びるように飲んでいたところ酔っぱらって貴女に原作と関わらせる呪いをかけてしまい申し訳……もういいや、あーなんか真面目なこと書いててもつまんないしもうてきとーに書ーこおっと、

おい、神、おい、

いいじゃん。死んだんじゃないんだしいいじゃん。もうめんどくさーい。くそが！いいでしょ！酒飲んだって、人の不幸を笑ったって、だから結婚出来ないって？余計なお世話よ！あァァ、もう袋の中の説明をします。袋の中は私があいつに脅されて作った最高峰の呪具です。えっへん＜（´＾｀）＞！

おー、一気に崩れたな。って呪具？

あっ呪具と言っても所有者を呪うとかそういう機能はついていないわ。いわば、まじ

ないというやつよ。
能力は所有者の身体能力の向上、知覚能力向上、衝撃吸収、各種耐性、自動再生、所有者の固定、成長能力よ。
最初の５つは名前そのままだから説明は無しで、所有者の固定も簡単よ。所有者以外が所有者に着用を許可無く着ると、着たものを締め上げて殺す機能よ。続いて成長能力これは所有者に合った能力を呪具が造り出す能力で、いつ生まれるかは分からないわ。着けたとたんに出来る人もいれば結局何も生まれない人もいる。こればっかりは本人次第だから。じゃあの（＾ー＾）ノ
Ｂｙ　呪い担当の神
なるほど、なるほどチートかな？
まあ、まずは見てみようか、な!?
一度開けて見てみようと思った時、袋の中から青い大量の謎の文字が書かれた布みたいな物が腕に巻き付いてきた。
「な!?･なんだこれは!?･」
そして、謎の文字が巻き付いてたとたんに青白く光だした。と思った瞬間腕に激痛が走った。
「がっ!･な、なんだこれ、くそが!･いったいどうなって……」

手紙が、急に空中から落ちてきたよく見ると、

追伸、呪具は所有者固定している時は魂に刻み込むからいたいよ～激痛が走るから気を付けてね～。

ｂｙ　親切な　Ｍｓ　Ｋ

奴か！奴なのか！者共出合え！出合…

「痛い！痛い！マジで痛い！あのくそ神は絶対殺す！絶対っあ！痛い本当に痛い！」

「兄貴！大丈……」

今、この空間を説明しようか。俺→右手に謎の文字が入った青い布を付けて左手で押さえており、叫んでいる。

妹→ドアを開けて何があったのかと思い兄の部屋を見ると兄が青い布を巻いて押さえながら叫んでいる。＝

「ご、ごめんなさい！」

兄が中二病になったと思う。

うん、あの神絶対ゆるざん！（血の涙）

ちなみに謎の文字は少し経ったら消えました。

と言うことがあったんだ。え、さっきの話と全然関係ないじゃあないか。だって？まあその後良く青い布を見ると青いコートだったんだよね。うん、アニメで絶望王が着ていたやつだ。

そしてこのコートを着けると超能力が強化されて何と！何と！瞬間移動出来るようになったんだ！これで逃げられるぜヒャッハーと思って試していたらいつの間にか、ヤンキーの前に立っていた。

繰り返す。

ヤンキーの前に立っていた！

ヤンキーが言うにはそこの子供が服を汚したらしく怒っているらしい。そして急に現れたお前は誰なんだぁ？

って言うことらしい。

仕方がないここは穏便にＴＡ★Ｉ★ＷＡ★を試みるしかないかよし、逝くぞ！（誤字に非ず）

「黙れ、子供ごときに服を汚された程度で囀ずるな」

（翻訳）『いや、子供が服汚した位でそこまで言わなくても良いじゃないですか』

「は？」
おい、オイオイオイオイなんかマイマウス壊れちゃったのかなー？
「何言ってるんだお前！急に現れやがって！」
ほら、怒ってる、怒ってるぞ！マイマウス！
「はっ（笑）その程度で怒るのは器が小さいぞと忠告してやっているんだ。と、言うことはお前の器は小さじ並だな（笑）」
「なっ！舐めやがって！」
何やってんのー！マイマウス！ほら、相手拳を握ってるから早く謝ろう。うん、ね？
「うん？」
「何だ！」
「本当にその服は汚れているのかい？本当は君の曇ったビー玉の汚れじゃないのかい？」
「あぁ!?」
こ、ここは話を合わせて、超能力発動！
汚れを浮かして地面にポイッ！さらにシワを伸ばしてまるでクリーニングに出したとき見たいな服の完成だ！
「ほら、見てみたまえ」

「なっ！」
　スゴーイ汚れ一つ無いやさっすが超能力ー。
「なっ？もう起こらなくても良いだろう？」
「ちっ！くそが！」
　と言ってヤンキーは怒ったまま去っていった。
「でだ、大丈夫かい？そこの子供」
　と言うと
「ありがとうございます！」
　と元気に礼を言ってきた。
「よし、次からはちゃんと前を向くんだぞ」
　ついでにポケットに入っていたドロップのハッカ味を渡す。
「ありがとう青コートのお兄ちゃん！」
「ああ」
　と言って手を振って去っていった。
　……よし帰ろうかな。と思った時。
「すいません。貴方って同じクラスのウィリアムくん？」
　美少女が話しかけてきた。あれ？こいつは！

「少し話してもいい？」
この、美少女の名前は！
「いえ、違います。人違いでしょう。ウィリアム何て金髪碧眼イケメン何て知りませんよ」
「あっそうなんですかすいませんクラスメイトに良く似ていて」
なるほど彼女はクラスメイトのウィリアムくんと俺を間違えたらしいまぁそういうこともあるさ。さぁ帰って妹の誤解を解くことに……
「いや、やっぱりウィリアムくんじゃん！」
あ、無理ですかそうですか。
この時が白崎……えーと……あっ！白崎かおりんとの出会いだった。

その後携帯の番号を交換した。
まあ、なんやかんだでその後も青コートが暴走して教室で喧嘩売ってきた苛めっ子に苛めの愚かさを説いたり。
『どうだい？　君はどう思う？』
『兄貴と呼ばせてください!!』

何故か兄貴と呼ばれたり、
教室で白崎と駄弁っていたらいちゃもん着けてきたイケメンに正義を教えたり。
『何が正義かわかったか？』
『はい！王が正義です！』
何故か王と呼ばれたり。
その後、天之川から報告を受け取っているのを見たメガネっ娘が凄い表情で怒ってきたから、天之川と同じことをしたり。
『君も理解したかい？』
『はい！あなた様が神なのですね！』
何故か神とよばれたり。
まあ、一年の時は他にも人助けをしたりして良いこともたくさんしたんだ。そして、二年になってやっと運命の日が近くなってきたなーと思っていたら今日だった。何故分かるかってそれはね。
「ようこそ、勇者様、そして同胞の皆様方」
ワーナンカ目の前に何か豪華な服を着たおっさんがいるーースゴーい。
……現実に戻そう。
何故かってそれはね。

「歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシュタルランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

もう、転移してるからＳＡ★